

らしっく

自分らしく、粋なくらし

まちづくり・生涯学習情報誌

2010.3 Vol.26

清明号

せいめい／きよらかでいきいきとした意。季節が移り変わるとき、それは植物が持つ命の終わりと同時に新たな誕生をむかえます。きよらかでいきいきと、季節の節目には、小さくも確かな感動があります。

- 特集「継続していくノウハウ」…………… P1
- らしっくコラム／らしっくキャンパス …… P4
- プラザ通信 …………… P5
- らしっく情報の森 …………… P9
- ひろしま八区イベントガイド…………… P11



特集 「継続していくノウハウ」

30年以上続いたのは、つながりを大切にしてきたから●ひろしまおもちゃ病院
有限会社として20年続き、昨年、NPO法人へ●NPO法人 わくわく元気舎
清掃が育んでくれる、地域への理解と国際性●楽打家ピースボランティア
「夢を持ち続ければ道は開ける」●NPO法人 ひろしまレクリエーション協会 鍋島 一仁
らしっくキャンパス●広島文教女子大学 パバママ応援団「ぶんこ」

特集「継^{して}続^{いく}くノウハウ」

ボランティア・市民活動を長く続けることは大変なことです。モチベーションの維持や、人材の育成、組織づくりなど、課題は多くあります。今回は、息の長い活動を続けている団体に、そのノウハウを聞いてみました。

30年以上続いたのは、つながりを大切にしてきたから

「ひろしまおもちゃ病院」

http://www1.megaegg.ne.jp/~hirosimamotyad/
メール: tyasuf1serituko@blue.megaegg.ne.jp

「オルゴールが鳴らなくなった原因は、歯車の歯の欠損と判明。どうしたら歯を復元できるかというアイデアを数人が出し合いながら直していく」



「ゴミ箱に行く一歩手前でおもちゃを助けたい」

ひろしまおもちゃ病院は、壊れたおもちゃを無償で修理する活動をしています。

広島市内の祇園、亀山、五日市、二葉の各公民館で、それぞれ月1回ずつ「開院」しています（1月と8月は休み）。午前10時から正午まで申し込みを受け付け、午後3時までに修理します。状態によっては直せないものもありますが、一度受け付けたものは9割以上の確率で直すという「名医」揃い。必要とあれば歯車などの部品まで自作して直しています。

依頼してきた人たちは喜んで受け取り、受付の募金箱に寄付をする姿も多く見られます。

**今年で丸32年
4つの拠点で活動**

活動を始めたのは、安佐南区で自営業を営んでいた大島誠二さん。町内会など地域の活動に積極的に携わっていたところ、祇園公民館から「おもちゃの病院を立ち上げないか」と促されたことがきっかけです。1978年4月、仕事で付き合っていた寺脇幹雄さんなど数人を誘って活動をスタートさせました。

2002年には安佐北区亀山公民館、2004年には佐伯区五日市公民館、さらに2006年には東区二葉公民館に開院。スタート時からのメンバーも手伝いに行きつづ、その地区ごとのスタッフが運営しています。現在、約30名のスタッフが活躍しています。

持ち寄るのは、技術と役に立ちたい気持ち

医師となるスタッフたちは、そのほとんどが、公民館でおもちゃ病院を見かけて興味を持ったと

どもたちを健全に育成することを目的としています。

冬は雪山スキーキャンプ、春から秋にかけては無人島キャンプのほか、廃校を利用した海の学校や、森の中の自然体験など、さまざまな活動をしています。

**契約をスモースにするため
有限会社でスタート**

わくわく元気舎がNPO法人として発足したのは2009年6月。前身である「有限会社元気」になる遊びの会社「から数えると、活動はすでに20年を超えます。

わくわく元気舎の副代表・西山和成さんは、大学時代から地域づくりや青少年育成に興味を持ち、アウトドアが好きだったこともあって子どもたちを対象にしたキャンプなどを企画していました。



▲呉市にある海沿いの廃校を利用した「チャレンジ」の海の学校にて、豪快な遊びの中でいたずらっぽい笑顔を取り戻す

▲修理できたおもちゃの車を試しに走らせてみる。中高ボランティア部の部員たち



いう人。活動内容そのものが魅力的なのか、自ずと人が集まってくるそうです。

レジスターのメンテナンスをしていた方など、多くの人は最初からある程度の修理技術を持っています。さらに大島さんたちベテランがノウハウを伝えることで、9割以上という「治癒率」につながっています。

しかし機械好きで技術があるだけでは、続かないスタッフが多いのも実情。寺脇さんは「技術オタクでは、直せないものが来たとき嫌になる。自分の技術向上ではなく、子どもの喜ぶ顔が見たいという気持ち

当時は、利益を出しつつ社会的課題を解決していく「ソーシャルビジネス」という概念がなく、特定非営利活動促進法（NPO法）もない時代。個人としての活動では、リスクや社会的な信用面で制限がありますが、法人化するには営利企業以外の選択はなく、1989年、西山さんが26歳のとき、有限会社を立ち上げました。

当時のキャンプは2泊3日で参加料2000円というのもざらで、収益には結びつきにくかったといいます。主に企業の新入社員研修やイベントを手がけ、そちらが収益の柱でした。文部省（現文部科学省）の事業「青少年長期自然体験活動推進事業」の受託をきっかけに、キャンプの企画も少しずつ増えていきました。

自然の中で遊ぶことが絶対、必要！

青少年育成事業に長く携わってきた岡平裕次さんが昨年、早期退職して西山さんの活動に合流したのをきっかけに、仲間と共にNPO法人わくわく元気舎を設立しました。

「理念がないなら、NPOはお勧めできない」
NPO法人にしたことで、事業報告書や収支計算書の公開など、事務処理は格段に手間が増えました。それでもNPO法人にしたのは「子どもたちを健全に育て、地域づくりをするという理念を実現したいから」。理念を表に出すことで、共感してくれる行政や民間企業も増える。それが信用を高め、次の事業に繋がると考えています。



▲わくわく元気舎の事務所にて、打ち合わせをする理事長の岡平さん（右）と副代表の西山さん

えています。西山さんも「子どもたちの問題解決能力を育むには自然体験が一番」と口を揃えます。今後は、希望者がいつでも参加できるように自然体験の機会をもっと増やすことが目標です。

2月12日、広島県教育の振興・発展に功績を残したとして「平成21年度広島県教育賞」を受賞しました。大変名誉なことであり、これはひとえに、今日までご支援やご協力をいただいた多くの方々のお力添えのお陰と、深く感謝しております。

私は、子どもの頃から将来は学校の教師になりたいと夢を描いておりましたが、電力会社に入社し、もう一つの道を歩み始めました。しかし、人の思いは諦めない限り通じるものです。企業には社員研修所が、地域には公民館等の社会教育施設があり、それらは

次世代の人材を育成する「学校」の役割を担っています。私はそこで、レクリエーションを通じた教育の場を与えられ、「社員の成長」や「地域コミュニティの再生」に微力ながら貢献することができたと感じていました。教師になる夢が形を変えて実現し、そのうえこの度の受賞につながったことは、私にとって大きな幸運としか言いようがありません。

「夢を持ち続けられれば、必ず道は開ける」ことを実感しつつ、どんな世界でも夢を持つことや、夢に向かって努力することの大切さを、次世代の人達に伝えたいと考え

「夢を持ち続けられれば道は開ける」

第5回 らしくコラム

こちらのコーナーでは、広島市で活動されている団体・事務局の方に市民活動やボランティアに対する思いをお聞きしています。
みなさんの思いと重なり、活動の輪が広がることを願って…。



鍋島 一仁 なべしま かずひと
■所属団体 NPO法人 ひろしまレクリエーション協会 会長
■活動内容 高齢化社会や自由時間の増加等が進む社会環境にあって、生きがいづくりや、健康で明るい社会づくりをめざし、レクリエーションの普及振興を図るため、指導者の養成や各種イベントを開催しています。
■活動のきっかけ 元来、人が好きで自然大好き人間です。また、輝いて生きることこどわった事もあり、必然的にレクリエーションの輪の中に入り、感動を汗で稼いでいます。
■現在の状況 「楽しさ」は、市民の方々が成長したり生きがいを感じた時、さらに人と人の繋がりを作った時に表れるもので、このためには楽しさをつくり出すレクリエーションの視点が重要となってきました。コミュニケーションワークにより、アイスブレイクやホスピタリティの充実にもけた活動を展開中です。
■連絡先 ☎082-241-1528
Eメール:office@npohiroshimarec.or.jp

次世代の人材を育成する「学校」の役割を担っています。私はそこで、レクリエーションを通じた教育の場を与えられ、「社員の成長」や「地域コミュニティの再生」に微力ながら貢献することができたと感じていました。教師になる夢が形を変えて実現し、そのうえこの度の受賞につながったことは、私にとって大きな幸運としか言いようがありません。

人間関係の希薄化など薄暗い雲が広がる空の下では、「一筋の光を放つ元気な灯りが必要です。一人ひとりが持つ小さな灯りをつなげ、明るい社会を広げるリーダーの力に期待しています。」

今、私の所属する「NPO法人ひろしまレクリエーション協会」は、1700人の会員を擁する団体となりましたが、一番の課題は人材育成です。特に、高い志を持って様々な立場の人々に交わり、同じ方向に向かって皆をコーディネートする（＝つなげる）リーダーを発掘し、育成することが喫緊の課題です。

東京から発信されたモノ・カネで設計された画一的な社会から、各地の個性や特徴を尊重した社会づくりが必要となった今、地域のリーダーへの期待はかつてないほど大きくなっています。地域の住民や団体と連携して地域資源の発掘や課題解決に取り組み、ソーシャルビジネスやコミュニティ・ビジネスとして捉え直すことで、自立した持続的発展が可能となります。つまり、レクリエーションが求めるリーダーと、地域社会が求めるリーダーは、どちらも「コーディネート能力」に長けた人材なのです。

らしくキャンパス

レポーター 広島市立大学マスコミ研究会 児玉 健一

広島文教女子大学 パパママ応援団 ぶんこ 代表 大崎 亜友美さん



今回のらしくキャンパスは広島文教女子大学をたずね、地域の子育て中の保護者のサポートなどを行っている、「パパママ応援団ぶんこ」代表の大崎亜友美さんにお話をうかがいました。

「ぶんこ」では定期的に月一回、大学内で0～4歳くらいの子どもとその保護者を対象としたオープンスペース「ぶんこ広場」を開いています。この「ぶんこ広場」は基本的に土曜日に開催されるため、お母さんだけでなくお父さんの参加もあるそうです。また、地域貢献活動として、アリスガーデンで「子ども広場」を地域の方々と協力して開催しています。

これらの活動は、名前の「パパママ応援団」の通り、子育て中の方に子どもとの遊びの場や、交流の場を提供することを目的としています。また、これ以外でも県内のイベントで協力して活動することもあるそうで、昨年はとうかさんやフードフェスティバルなどに参加したそうです。

オープンスペースでは、手作りのおもちゃを使った遊戯や紙芝居の上演なども行っており、ここで使われている手作りおもちゃは主に廃材である

ダンボールや牛乳パックなどから作られているそうです。これは家庭でも同じ様なものを作ることもできるように考えてのことだそうです。

活動をしていく中で意識していることをうかがった際には、「自分たちが楽しめる」ということを第一に挙げられていました。ボランティアという性質上どうしても自分たちの普段の生活と比べて、「ぶんこ」での活動が二の次などになってしまうがちです。「ぶんこ」での活動自体にそれぞれが意味を持てるようにするためにも「楽しめる」ということをまず意識において活動しているそうです。そのためには、参加している地域の方々にとても良い環境を作っていくことが必要と考え、常にこのことも念頭において活動しています。

「ぶんこ」の現在のような活動が本格的に始まったのは2007年ごろ。まだまだ改善の余地があるので、毎回の活動後には必ず反省会を行い、今後に向けての改善点を話し合い、参加して下さった方々にアンケートを取るなどしているそうです。

今後はより地域に定着したオープンスペースとして活動していけるように、後輩たちへ知識や経験を伝えていくつもりだそうです。

取材させていただいた大崎さん、ありがとうございました。



▲活動の様子



▲2月28日に行われた、広島平和記念公園でのクリーンボランティア（清掃活動）。公園内全域をくまなく清掃する



▲終了後は飲み物やお菓子でくつろぐ。この日は観光で訪れていた人や、外国（中国）の方の参加もあった

清掃が育んでくれる、地域への理解と国際性

【楽打家ピースボランティア】

連絡先 ☎090-6834-5879（事務局 長 迫田さん）
http://rakudaya2009.web.fc2.com/

昨年誕生したばかりのボランティア団体があります。活動を続けるうちにさまざまな参加者が集まり、活動は広がりをを見せています。そんな「元気」の秘密を聞いてみました。

毎月第4日曜日に、平和記念公園全域を清掃
楽打家ピースボランティア（以下「ピースボランティア」）は、2009年3月に活動を始めたばかりの新しい団体です。毎月第4日曜日の午前10時30分から約1時間、広島平和記念公園内の清掃を行っています。

メンバーは、小学生から60代まで約30名ほど。主に大学生までの若いメンバーが中心です。ホームページでの参加者募集や、当日、現地での受付も行っており、総勢50名になったこともあります。

参加者が用意するものは特になく、元安橋東詰のオープンカフェの南隣りに午前10時20分までに行けば清掃用具を貸してもらえます。終わった後はコーヒーやジュースを飲んでくつろぎ、会話が弾むことも。「じゃあまた来月」と、次の活動を約束して帰る参加者もいます。

和太鼓演奏とともにクリーンボランティアも開始
ピースボランティアが生まれたのは、事務局長の迫田浩二さんが、府中町を拠点に和太鼓の演奏活動をしている団体「安芸府中奏作太鼓楽打家」（以下「楽打家」と出合ったことがきっかけです。

迫田さんは電力会社を使うような巨大な電気機器やシステムを扱う営業マン。仕事にやりがいや充足感を感じつつも、膨大な金額を動かす日々の中、「地に足の着いた感じ」が欲しくなり、休日には地域のために活動しようと考えていました。

子どものころ太鼓の経験があったこともあり、楽打家のイベントに参加。楽打家はもともと、子どもたちの健全育成を目的の一つにしていることから、迫田さんがメンバーたちに地域への貢献活動として、「クリーンボランティアをした」と提案したところ、賛同が得られ、活動がスタートしました。

子どもたちの太鼓の経験があったこともあり、楽打家のイベントに参加。楽打家はもともと、子どもたちの健全育成を目的の一つにしていることから、迫田さんがメンバーたちに地域への貢献活動として、「クリーンボランティアをした」と提案したところ、賛同が得られ、活動がスタートしました。

世界中の観光客が活動を見ている
迫田さんは「平和の聖地である広島平和記念公園を清掃すること、自然に平和への理解が深まる」と考えています。

何よりうれしいのは、子どもたちが生き生きと清掃すること。ぱっと見ただけでは分からないような茂みの奥から空き缶を探し出した時の誇らしげな表情、外国人観光客から声を掛けられ、言葉を選びながら会話する姿を見ると、頼もしささえ感じます。

世界中から多くの人が集まる場所、色々な国の人に見られ、声を掛けられることで、国際性も培われていると実感しています。

「今後は植樹活動なども行いたい」。ピースボランティアは、人と地域、緑を育て、地域にしっかりと根付くことを目指しています。



▶「見きれいな広島平和記念公園にも多くのゴミがある。1回で50袋近く集めたこともある」